

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 現代朝鮮語におけるkəna、na、kənについて |
| Author(s) | 深見, 兼孝 |
| Citation | ニダバ , 17 : 34 - 39 |
| Issue Date | 1988-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047190 |
| Right | |
| Relation | |



現代朝鮮語における *kəna*、*na*、*kən* について

深 見 兼 孝

はじめに

現代朝鮮語において、*kəna*、*na*、*kən*は、次のような環境において、互いに非常に類似した意味を表す：1) *kəna*、*na*-X__Y+copula (X, Yは名詞) 2) *kəna*、*na*,*kən*-X__Y__ (X, Yは動詞、形容詞、名詞など)。本小稿は*kəna*、*na*、*kən*が、このような環境に現れた時、どのような構文上、意味上の制約を伴うかを明らかにしようとしたものである。

1 X__Y+copulaにおける *kəna* と *na*

*kəna*は*na*と違ってYに格助詞が結合している場合は用いられないが、次の例のように、copulaがYの後に続く時は、いずれも「XまたはY」という意味を表す句を形成することができる。

1 (黒人男性が店に入りパーマをしている黒人女性に写真をあずけて行った。)

kɨ yəʧanɨn saʧinɨl matkiko kan kəmtuŋiɨi yakhoŋtaikəna¹ ama anɨil kəsita.

その女は写真をあずけて行った黒人の婚約者か多分女房だろう。(CoHeil「Tenat」)

2 *nanɨn kaŋtaŋ ap^hɨl ʧinal ttemata kikkətheya supək myəŋɨl ap^he tuko myətmyəʧ^hi sanɨka tan wie ollaka kwakyəkhan ənsalo səŋmyəŋsəlɨl naŋtokhako itnɨn kəsɨl toŋʧoŋ pol su issətta. kɨ sanɨnɨn O Maŋʧunina toksəlkaŋəttən Kim Oʧiniətta.*

私は講堂の前を通るたび、時折せいぜい数百人を前にして数人の男が壇の上にあがり、過激な調子で声明を朗読しているのを見ることができた。その男はオ・マンジュンか毒舌家だったキム・オジンだった。(ʧ^hwe Inho「Musəun poksu」)

*kəna*が用いられている1は推量、2の中の*na*が用いられている文は過去の事実を表しているという違いはあるが、どちらの文もAnɨn X__Y+copulaという基本構造を持ち、「AはXまたはYだ」という命題的意味を表している。では、この二つの文にはどのような差があるのだろうか。ここでは、ひとつの可能性として、*kəna*と*na*は、その前後の語句をさらに大きな句としてまとめる力に差があって、それは前者が後者より大きい、ということ挙げておこう。勿論、これが結論と言うには早計であるが、いくつか示唆的なこと

がある。まず、インフォーマントが、実例があるにもかかわらず、上の2や、次の3、4のようにnaの後に修飾句を伴う名詞が来ることに抵抗感を感じることである。

3 (込み合った汽車の中で) $\text{t}^{\text{h}}\text{alil mot t}^{\text{h}}\text{apn}^{\text{h}}\text{in salam}^{\text{h}}\text{in t}^{\text{h}}\text{oh}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{ik}^{\text{h}}\text{ona}/?na \text{ a}^{\text{h}}\text{u atughan salamil ppunilakuyo.}$

席を見付けられない人は、初めての人かかなり鈍い人ぐらいなもんですよ。

4 $\text{hyukatte n}^{\text{h}}\text{eka kakosip}^{\text{h}}\text{in kosin mikukik}^{\text{h}}\text{ona}/?na \text{ m}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{jsuka s}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{s}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{g}^{\text{h}}\text{k}^{\text{h}}\text{elinin ap}^{\text{h}}\text{ilik}^{\text{h}}\text{a}^{\text{h}}\text{ta.}$

休暇に私が行きたい所はアメリカか猛獣がはいかいするアフリカだ。

3、4においてnaの代わりにkənaを用いれば抵抗感はなくなる。2についても同様である。

次に、小さい資料²ながら、copula の後続如何にかかわらず、kəna、naがX_Yとその鏡像構造(X、Yは名詞)を形成している例(kəna 5例、na 30例)を調べたところ、kənaのみが鏡像構造を形成し(2例)、その2例は、分かち書きで区切られる7つと8つの部分から成るYを含んでいたことである。これに対して、naの場合、Yは同じ数え方で最高3つの部分から成っていた。このような調べ方が厳密な言語学上、統計学上の手順を踏んでいると言うつもりはないが、kənaとnaに句形成力ついて差があることは、一つの可能性であろう。

2 Xna YnaとXkəna Ykəna

(1) X、Yが名詞の場合

この句を含む文は、XについてもYについても同じ事柄が成立することを表す。まず、次の例文を見られたい。6は話し手の推量、7は事実を表している。

5 (学生が警官隊に投石するのを見て)

$\text{hanin t}^{\text{h}}\text{ikina makn}^{\text{h}}\text{in t}^{\text{h}}\text{ikina tul ta m}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{m}^{\text{h}}\text{ok}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{kin k}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{t katta.}$

やる方も防ぐ方も両方とも(tul ta)盲目的なようだ。(2に同じ)

6 $\text{k}^{\text{h}}\text{inin ya}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{na kokina (silh}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{ha}^{\text{h}}\text{ti anhko) m}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{kn}^{\text{h}}\text{inta.}$

彼は野菜でも肉でも(嫌がらずに)食べる。

ところが、次の7のように話し手が自分の好みに反しながらも、意志を表明する文は座りが悪い。

7 $?etta! \text{ sanina patana ka tuma.}$

えい!山でも海でも行ってやる。

ここでは話し手はX、Y個々について意志を表明しているのではない。話し手の主眼は行き先の選択を放棄していることにあるのである。従って、X、Yは話し手にとって選択の対象とならないのと同時に、5や6の場合と違って、個別的な事柄というよりは、むしろ同類項とも言えるものなのである。例7を次の文と比較されたい。これは適格である。

7' $\text{sanina patana nanin t}^{\text{h}}\text{emiitn}^{\text{h}}\text{in kosilo kaketta.}$

山だろうが海だろうが私は（自分が）興味がある（と思う）ところへ行く。
ここでは「自分の好みに反して」というニュアンスはなく、XとYは話し手の選択の対象内にある。すなわち、*čemiitnɪn kot*の範囲内にあるのである。さらに次の例を見られたい。

6' ?nanin yač^həna kokina (silhəhači anko) məkkessɪpnita.

私は野菜でも肉でも（嫌わずに）食べます。

この文は必ずしも「好みに反して」というニュアンスを伴わないが、話し手にとってX、Yの別が意味をなさないことは例6の場合と変わりがない。何故なら、話し手は食べ物の種類について選択をしないことを表明しているからである。6'が座りが悪いのはそのためであろう。

以上の考察から、Xna Ynaという句は、話し手にとってX、Yの別、選択がない場合には用いられないと言えるだろう。いくら選択の幅が普遍化³しても、その中の項目について語られるのでなければnaは用いられないのである。一方、kənaは例5を除いて全てに用いられる。Xkəna Ykənaが構文上の主語の位置に表れず、より述部に近い位置に表れるところから見て、kənaはnaよりも語尾的性格が濃厚なのだろう。

(2) X、Yが動詞、形容詞の場合

今のところ、この句がどのような構造を持った文に用いられるるか、X、Yの意味的關係においてどの程度の多様性が許容されるかについてははっきりしない。そこで、ここではX__Y__（＋主語）＋述語という構造を持つ文で、X、Yは常識的に反意関係にあり⁴、かつ、主格以外の格成分を伴わない場合について考えて見たい。

まず、次の例文を見られたい。

8 toniya itkəna əptkəna saŋkwanəpsə/salakal su itti anha!/mač^hankačiya.

8' toniya issina əpsina saŋkwanəpsə/salakal su itti anha!/mač^hankačiya.

お金なんてのはあってもなくても関係ない／生きて行けるじゃないか／おんなじだ。

9 k^hika k^hikəna čakkəna saŋkwanəptta/inkanin maɪmssita.

背が高かろうが低かろうが関係ない／人間は心だ。

9' k^hika k^hina čakina mač^hankačiya/inkanin maɪmssita.

背が高かろうが低かろうがおんなじだ／人間は心だ。

9でinkanin maɪmssitaが選ばれた場合の文の適格性についてインフォーマントの間で意見の一致を見ない。これは恐らく、kənaについて述部がどの程度まで客観的な事柄を表しうるかについて彼等の間で受け取り方が異なっているからであろう。次の10のように述部が過去の事実を表している場合にはkənaは用いられない。一方、9'については意見の食い違いはないようである。また、10'は適格である。

10 ?toni itkəna əptkəna kɪnɪn sulman masyətta.

10' toni issina əpsina kɪnɪn sulman masyətta.

お金があってもなくても彼は酒ばかり飲んだ（飲んでいた）。

さて、ここまで述部に注目してきたが、次にX、Yの意味関係に注目してみよう。次の11を見られたい。11は過去の事実を表している。

11 *ikikəna/?na təkəna/?na kının nıl t^heyənhetta.*

勝っても負けても彼はいつも平然としていた。

ここではkənaが用いられる一方naは用いられず、8~10'から予想されることと反対になっている。ここで、8~10'のX、YについてはX、Yを両極にして中間段階が考えられるのに対して、11ではそれが考えられないことに注目されたい。すなわち、iki- '勝つ' とti- '負ける'は量でも程度でもなく、互いに完全に断絶した事柄なのである。naはX、Yの中間段階が考えられない場合には用いられない、とすれば、11においてnaが用いられないことの説明がつく。また、次の12'においてnaが用いられないことの説明もつく。naについて言えば、述部はX、Yの中間段階のいかなる段階についても成立する事柄を表すと考えるのが、その基本用法に照らして妥当であろう。

12 *č^həlsuka itkəna əptkəna hweinin tınheghača.*

12' *?č^həlsuka issına əpsına hweinin tınheghača.*

チャールスがいてもいなくても会議は進めよう。

一方、kənaの方は、X、Yに中間段階が考えられる時は、述部は客観性の高い事柄は表わせず、そうでない場合はこれが可能であると言えよう。

ところで、X__Y__のYが否定を表すmal-である場合がある。次の例を見られたい⁵。

13 *ilkkəna malkəna maımtelo həla.*

読もうが読むまいがかってにしろ。

14 *pika okəna malkəna nanın kaketta.*

雨が降っても降らなくても僕は行くよ。

15 *ilən solan sokesənin nuka čukkəna malkəna č^hekim čil salamın əpsəyo.*

こんな騒ぎの中では誰が死んでも責任を取る人はいませんよ。

上の三例からも分かるように、kənaについては、述部の表す事柄の種類はYがmal-でない場合と特に違いがないようである。また、Xのアスペクト的性格に何か制限があるわけでもなさそうである。一方、naについては述部の表すことができる事柄の種類にかなり制限があるようである。今のところ、直接に「同じだ」を意味する場合の他に、どのような場合があるか不明である。先の2(2)の例8'のəps-をmal-に替えた場合、mat^hankatıya以外は座りが悪い。また、15をnaで言い替えることはできない。

3 kənについて

kənはkənaの省略形とみなすのが一般的であるが、そうかと言って必ずしもkənaとkənの

機能が100%一致するとみなすのは早計であろう。勿論、両者の機能は、先に第2節の(1)で挙げた例6、6'、7、7'、同(2)で挙げた例8、11、15をkənを使って言い替えることができることから見て、共通するものがあると言うことができる。以下はその例である。

6' kɪnɪn yaɬ^hekən kokikən (silhəhaɬi anko) məknɪnta.

6'' nanɪn yaɬ^hekən kokikən (silhəhaɬi anko) məkkessɪpnɪta.

7' etta! sanikən patakən ka tuma.

7'' sanikən patakən nanɪn tɛmiitnɪn kosɪlo kaketta.

8' toniya itkən əptkən saɲkwanəpsə/salakal su itti anha!/maɬ^hankatiya.

11' ikikən tɪkən kɪnɪn nɪl t^heyənhetta.

15' ilən solan sokesənɪn nuka tɪkkən malkən t^hekim tɪl salamɪn əpsəyo.

しかし、興味があることは、kənがkənaより広く用いられるらしいことである。まず、先の2(2)で挙げた例9をkənで言い替えた場合、inkanɪn maɪmssitaも用い得ることにインフォーマントの間に意見の差はない。次はその例である。

9' k^hika k^hikən tɪkkən saɲkwanəptta/inkanɪn maɪmssita.

述部の表す事柄の客観性の度合いについて、kənはkənaよりも制限が緩やかなのかもしれない。次に、2(1)で挙げた例5をkənで言い替えられらると感じるインフォーマントがいる。また、言い替えられないにしても、kənaで言い替えた場合より座りがいいのが、彼等間の一致した意見である。次はその例である。

5' hanɪn t^hiki *kəna/(?)kən maknɪn t^hiki *kəna/(?)kən tul ta məmɔktəkin kət katta.

おわりに

以上の議論をまとめて提示しよう。

1) kənaとna: X__Y+copula(X、Yは名詞)は「XまたはY」を表すが、kənaの方がnaより句としてのまとまりをつける力が大きい可能性がある。

2) kəna、na、kən: X__Y__はi)X、Yが名詞の時、XについてもYについても同じ事柄が成立することを表す。しかし、naはX、Yが話し手の選択の対象でない時は用いられない。一方、kəna、kənにはこのような制限はないが、少なくとも前者はX__Yが構文上の主語に当たる時は用いられない。ii)X、Yが動詞、形容詞の時、XとYの中間段階が考えられる時、naが用いられる。この時、kənaは述部の表す客観性について制約がある。また、Yが否定を表すmal-の場合、naについては、述部の表し得る内容にかなり制限があるらしい。

さて、2(2)では取り扱う文の構造を制限したが、kəna、na、kənの機能を全面的に明らかにするには、tɪnti、tɪnka、tɪnとの比較が不可欠である。次回、機会があればこれを行ってみたい。

注1 kəna, na, kənが母音終わりの名詞に結合する時は、iが先行しないのが原則である。本小稿ではこれらが助詞か語尾か（あるいは他のものか）という問題、また、仮に語尾とした場合、語幹と語尾の境界をどこに置くかという問題には触れないことにしたので、このiが何であるかについては不問にし、以下の例文では、全てkəna, na, kənのみに下線を引くことにする。

なお、インフォーマントには、広島大学教育学部に留学中の、Ko Sunyəŋ, Cu Cəŋman, C^hwe Inhoŋの諸君にお願いした。この場を借りて感謝の意を表したい。

2 次のような韓国現代小説からである（著者、タイトル、発表年の順）。

Soŋ Yəŋ 「Cugəŋsən kič^ha」 1972

I Cəŋhwan 「Yəŋki」 1969

Cə Səncək 「Yəŋčari čənsəŋsite」 1973

Cə Heil 「Tenat」 1972

C^hwe Inho 「Musəun poksu」 1973

Han Sansu 「Sawəlii kkit」 1972

3 Hoŋ Saman 「Kukət^hiksutəsalon」 (Hakmunsa 1983) pp.211-233参照。また、本文2（2）の例11の説明についてもこれを参照されたい。

4 この節のkənaの用法について、X、Yが「（通常）反意的関係」にある、とするのが辞書の一般的傾向のようである。

5 例13、14は大阪外国語学校朝鮮語研究室編「朝鮮語大辞典」（角川書店 1986）からである。